

■はじめに　　↳ 4次元とは何か？

この書籍のタイトルは『4次元思想とフラットランド』であるが、まず、『4次元思想』とは、「4次元を追求する思想」のことを言っている。では、「4次元」とは何なのか？ 4次元というと、かの有名な「ドラえもん」の「4次元ポケット」のイメージが大きいかもされないが、あの「4次元ポケット」は、『4次元空間』に道具を収納することによって、3次元的な物理法則を無視して無限に道具を収納することができる・・・というSF的な発想から出てきた品物である。今回でいう「4次元」も、基本的にはそうした「4次元空間」のことを言っている。我々が基本的に住んでいる「3次元空間」は、「x, y, z」の三つの軸で構成されているが、「4次元空間」とは、そこにもう一つ軸を加わった空間・・・ということである。

それに対して、「4次元」というと『4次元時空』というものを指す場合もある。これは、かの有名な「アルベルト・アインシュタイン」が、自身の打ち出した理論「**相対性理論**」の中で用いていた概念であり、これは、「3次元空間」に「時間軸」を加えて「4次元」としたものである。つまり、普通の我々が住んでいる3次元空間とほとんど変わらないものと言って良い。今回扱う「4次元」とは、この「4次元時空」ではなく、「4次元空間」であることを、まず押さえてもらいたい。

17世紀以降、西洋では数学が著しく発展していったが、そうした中で「4次元」という言葉もたまに使われるようになり、近代の西洋ではその概念について探求する著名人などが出てきて、大いに話題になることがあった。代表的なものとして、19世紀に『エドウィン・アボット・アボット』という人が執筆した『フラットランド 多次元の

冒険という著作がある。アボットはイギリスの教育者であり、また、聖職者でもある立場の人だったが、幾何学に對する高い関心もあり、「4次元」で定義される世界について強く惹かれていた人物だった。そこで、『フラットランド』という「2次元の図形の姿をした住人が生息する、2次元平面の世界」という架空の世界を作り、そこから「2次元の住人」にとつての「3次元の世界」をイメージすることによつて、「4次元の世界」への展望を思い描いた。そのような発想からアボットの執筆した著作は、後に「4次元」を探求する人達に大きな影響を与えた。本書の前半の「4次元思想とフラットランド」の章では、まず、アボットの著作「フラットランド 多次元の冒険」についてを中心に扱い、そこから「4次元」について述べていく。

そして、後半の「4次元思想とヌーソロジー」の章では、『半田広宣』という人の提唱した『ヌーソロジー』という宇宙論について紹介しつつ、それと「4次元」とが関わっている部分を中心に書いていく。「ヌーソロジー」とは何か？ということについては、詳しくは後半の冒頭の章にて取り上げるが、それは、1995年頃から立ち上がったきたものであり、哲学に科学に物理学に数学、さらには、神秘主義といったオカルトめいたものまで包括している宇宙論・・・のようなものと言うことができる。そして、「4次元」に関することもその対象範囲となつているため、それについて深く掘り下げることが可能。そこではどういう風に4次元が扱われているか？ また、どういう方法で4次元を導くことができるか？ 本書の後半ではそういったことを扱っていく。

本書のメインテーマである「4次元」という概念は、人間にとつては「異世界」とも解釈することができるものだと思う。実に抽象的なものであるが、人間の意識や精神とも関わりのあるものだと思う。そして、「次元」という概念や、「x, y, z」といった「軸」を用いてそれを説明することにより、いくらか数学的にそれを記述したり、

説明したりすることが出来る。また、「4次元」という「異世界」は、人間の無意識の世界とも通じており、それを探求することは、自分の本性である個性を持った「自己（セルフ）」を発見することにも繋がっている。

従って、「4次元思想」とは、精神的なものと数学的なものとを繋ぐ思想であると思う。

目次

■ 4次元空間に関する一般見解	10
・ 4つめの軸	10
・ 観察の法則	11
・ 切断の法則	12
・ 4次元立方体とその展開図	13
・ 4次元はどこにあるのか？	15
第一章 4次元思想とフラットランド	17
■ 4次元思想の歴史を軽く	18
・ 4次元思想の発端とピーク	18
・ アインシュタインの登場	19
■ アボットの遺産 「フラットランド 多次元の冒険」	21
・ アボットの人物像	21
・ 「フラットランド 多次元の冒険」の構成	22
・ 「フラットランド 多次元の冒険」の内容	24
■ フラットランドの特徴的な所	26

・「辛抱強くあれ、世界は広大無辺なのだから」	27
・角がとがっていると人が死ぬ	28
・ご婦人の扱い方は丁重に	29
・階級社会のような構造	30
・角の数を判別する方法	32
・ご婦人の知性の問題	35
・一世代上がると角の数が增える	36
・角が不規則なのは障害者扱い	37
・「落ちこぼれ」の多角形の扱い	38
■スフィア氏と出会う話	43
・スクエア氏の驚き	45
・スペーススランド入りとスクエア氏の動揺	49
・フラットランドでの不穏な動き	50
・再度、スペーススランドにて	53
・スクエア氏の帰還とフラットランドでの苦難	55
・「フラットランド 多次元の冒険」の結末	57
■キリスト教の重要性	60

・グノーシス主義と、その元となる考え方	61
・ローマ・カトリック教会の登場	62
・カトリック派キリスト教VSグノーシス主義キリスト教	64
・キリスト教の面白さ	65
・プロテスタントの登場	71
・裏切り者の「ユダ」の扱い	73
・スクエア氏とグノーシス主義	75
■アボットの著作から学べること	77
・現実の原理をよく知る	77
・想像力を持つ	78
・微少なる「厚み」を見つける	79
・グノーシス主義の姿勢	80
・最終的な問題点	81
第二章 4次元思想とヌーソロジー	83
■「ヌーソロジー」とは何か？	84
■「ヌーソロジー」における4次元導入	86
・「反転した空間」と呼ばれる場所	86

・虚数について.....	87
・「ローレンツ収縮」について.....	88
・光速度突破による反転ビジョン.....	90
・マイクロサイズの微小球.....	92
・平面化する景色.....	93
・「超越論的主観性」の方向.....	96
・「4次元目の軸」の位置.....	97
・時間軸の反転と4次元方程式.....	98
・虚数 i となった時間.....	101
・4次元時空VS純粹持続.....	102
・微小の「厚み」の発見.....	104
・異世界への通路の場所.....	104
・「夢」の世界観.....	106
・「新しい軸」は問題解決の方向性.....	107
■ 4次元思想と「自己」の発見.....	109
・自身の「主体」の発見.....	109
・リアル妖怪ウオッチ.....	112

・ 客体と想像的自我	1
・ 「前」と「後ろ」の関係	1
・ 5次元について	1
・ 「自己」について	1
・ 自己発見のフレームワーク	1
■ 「ヌーソロジー」の詳細について	1
第三章 4次元思想・エトセトラ	1
・ 仏教と4次元	1
・ 仏教の多様性について	1
・ 「刹那」という概念	1
・ 「止観」について詳しく	1
・ 素粒子の世界について	1
・ エーテル空間と呼ばれるもの	1
・ 右脳の働き	1
・ 精神修養について	1
・ 生と死の彼岸のロマン	1
	4
	0
	3
	7
	3
	6
	3
	4
	3
	4
	3
	1
	3
	1
	8
	2
	8
	8
	2
	6
	2
	5
	2
	3
	2
	1
	8
	7
	4
	3

■ 4次元空間に関する一般見解

・ 4つめの軸

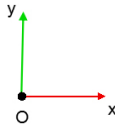
まずは「次元」の定義を確認し、そこから導き出せる簡単な「4次元」の概要について説明する。

まず、「次元」とは何か？それは「**軸の数で決まるもの**」である。次の図を参照してもらおうと簡単であるが、軸の数が一本だと1次元、軸の数が二本だと2次元、軸の数が三本だと3次元・・・となる。

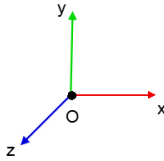
～1次元～



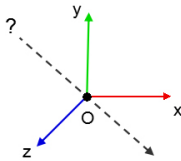
～2次元～



～3次元～



～4次元～



そして、それぞれ、1次元には「線」が、2次元には「面」が、3次元には「立体」が存在している。4次元は、3次元に加えて「軸」が一本追加された次元ということになる。付け加えるなら、こうした次元の法則において、新しい軸は、既存の軸の「垂直方向」に存在しているため、「4次元目の軸」というのも、3次元の軸の「垂直方向」に存在していると導き出すことができる。

第一章 4次元思想とフラットランド

■ 4次元思想の歴史を軽く

・ 4次元思想の発端とピーク

「4次元」という言葉が初めに使われたのはいつ頃なのか？ 17世紀に「ヘンリー・モア」という哲学者・神学者が、靈魂を説明するにおいて「4次元」という概念を使ったという話がある。ヘンリー・モアは、プラトン主義の哲学者であったため、プラトンの「イデア」を探索する上でこうした概念に触れていたが、その一方で神学者であったため、キリスト教の影響も受けている。キリスト教圏において「異世界」のような概念が出てくる時は、大体、キリスト教で言われている「神の国」のようなものの影響を受けている。4次元の思想や数学の発展が主流となっていないのは西洋であり、西洋といったらキリスト教であるため、必然的にキリスト教との関わりの中でこうしたものが出てくることが多い。

4次元思想が本格的に流行り出して来たのは19世紀頃の話である。19世紀のヨーロッパは、なかなか特徴的な時代であり、産業革命による科学技術の発展がピークに達して、**「近代理性」**と呼ばれるものが至上となっていた時代である。科学技術の素晴らしさや、唯物論的な価値観がもてはやされていた時代であるが、同時に、その弊害も出てきた時代でもあり、「近代理性」に対するアンチテーゼが同様に出てきて、それが「神秘主義」であったり、自然科学と違う視点から見た学問であったりと、「反近代理性」に該当するものが立ち上がってきた時代だった。

4次元思想も、19世紀のそうした潮流の中で流行っていくことになった。

今回のメインとなる人物、「エドウィン・アボット・アボット（教育者・聖職者）」を始めとして、「チャールズ・ハワード・ヒントン（数学者）」、「ビョートル・ウスペンスキー（神秘思想家）」、「クロード・ブラグドン（神秘思想家）」・等の人物が出てきており、「エドウィン・アボット・アボット」↓「チャールズ・ヒントン」↓「ビョートル・ウスペンスキー」とそれぞれ影響を受けている。「ビョートル・ウスペンスキー」の著作では『ターシヤム・オルガナム（第三の思考規範）』というのが有名だが、ウスペンスキーの本を「クロード・ブラグドン」がアメリカへ翻訳し、アメリカで4次元思想が流行り、その影響が日本に来ることもあった。

数学・物理学の界限でも、4次元については話題になっていたようである。先に上げた「チャールズ・ハワード・ヒントン」は、数学者として大いに活躍していた。

・アインシュタインの登場

こうして発展していった4次元思想だが、20世紀になり、かの有名な「アルベルト・アインシュタイン」が登場することにより、一旦の結論が出ることになる。

アインシュタインの偉業としては、「相対性理論」の発表があるが、そのうちの『特殊相対性理論』において、アインシュタインは「時間」の考え方を拡張し、その中で「4次元目の軸は『時間』である」と捉えるように記述していた。これによって数学や物理学の世界では、4次元とは、時間軸が4次元目の軸となった「4次元時空」（これは、「ミンコフスキー時空」とも呼ばれる。）であるという結論が出てしまつて、4次元に関する探求はそこで終わりに

■アボットの遺産 「フラットランド 多次元の冒険」

・アボットの人物像

さて、話を19世紀に戻すが、この章では、「エドウィン・アボット・アボット」の書いた「フラットランド 多次元の冒険」という著作の内容を中心に書いていく。

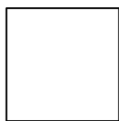
まず、エドウィン・アボット・アボットとはどんな人物なのか？

アボットの生まれは1838年であり、古典の分野でも優秀な成績を修めながらも、1863年にイギリス国教会の司祭として選ばれている。また、主に関心があったのは教育の分野であり、その生涯のほとんどを教師として過ごした。1862年に初めて教壇に立ち、1865年には、自信の母校であるシティ・オブ・ロンドン・スクールの校長を勤めることになった。自分より年上の人間がはるかに多い中でも、その学校の著名な校長となり、1889年に至るまで校長としてとどまり続けた。その教師としての卓越さは評判であり、他校からのスカウトも多数来ていたらしい。

それから、アボットは、宗教改革者としての一面も持っていて、イギリス国教会の「広教会派」のメンバーであった。イギリス国教会には他にも、「高教会派」（カトリック的な儀式要素を重視する一派）や「低教会派」（プロテスタンティズムに近い）というのがあったが、「広教会派」はそれらと対立する宗派であり、キリスト教的な傾向を持つ社会民主主義に繋がっていた。

・「フラットランド 多次元の冒険」の内容

My name is Square.

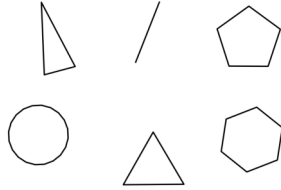


アボットの書いた書籍「フラットランド 多次元の冒険」は、平面で構成されている世界『フラットランド』が主な舞台である。そして、主人公はフラットランドの住人『スクエア』氏である。スクエア氏の形は「Square」・・・つまり、「**正方形**」である。そして、フラットランドには、この「スクエア」だけでなく、様々な図形・・・三角形や多角形や線、限りなく円に近い多角形などの住人が生息している。次に描いたような図形が住人として住む、平面の世界をイメージして欲しい。

～主人公～



～住人たち～



この「フラットランド」は、ご覧の通り平面の世界なので、「高さ」という次元が無かったりする。「横」や「縦」には避けることができるが、「高さ」方向には避けることができない。この住人にとって「上」とは「北」のことしか指さない。y軸が「北」になっており、z軸というものが存在しない。簡単に想像できる通り、少し窮屈そうな世界である。

それから、住人がみんな図形であり、角がとがってる場合には、ぶつかると傷がついたりするらしい。色々大変な世界である。

この2次元世界である「フラットランド」に対して、3次元世界は『スペースランド』と呼ばれている。これは早い話、我々が住んでる世界と同様の世界である。物語の後半にて、「スクエア」氏はそちら側の世界に行くことになったりする。

この物語は、「スクエア」氏が我々に対して語りかけるように始まっていくが、前半部の内容は、まず「フラットランドの特徴」の話である。平面と図形しかない世界ではどんな奇妙なことが起きているか、確かに窮屈そうな所であるが、どのような場所なのかについての記述である。そして、後半部の内容は、「スクエア」氏が『スフィア』氏に出会い、「スペースランド」へ行く話になる。このスフィア氏の形は「Sphere」・・・つまり、本来は「球」の形をしている、「スペースランド」の住人だが、「スペースランド」にいる「球」が「フラットランド」に入り込むことにより、「円」の姿をして登場する。スクエア氏は、スフィア氏との出会いによって、自分達より高次元の世界（我々にとっては当然の世界でもある3次元）を垣間見ることになる。

つまり、言ってしまうと、これは「4次元を知るストーリー」というよりかは、「2次元の者が3次元の世界に行くストーリー」なのであるが、アボットのこの作品の目的は「4次元」を描くことにある。従って、「2次元の者が3次元の世界に行く」ことで「3次元の者が4次元の世界に行く」ことが、少しでも分かるように書かれている。ここで登場するスクエア氏は、3次元空間である「スペースランド」に行った際に、「4次元」に関しても言及することになる。こうした事象を通じて、アボットは「4次元」の世界を何とか表現しようとしていたのである。

■フラットランドの特徴的な所

ここから、「フラットランド 多次元の冒険」の前半部に書いてある、フラットランドの特徴的な所を述べていく。先ほど述べた通り、フラットランドは平面図形の住人しかいない世界であり、建造物や道具なんかもすべて平面図形

■キリスト教の重要性



さて、これまで「フラットランド 多次元の冒険」の内容を説明してきたが、ここから「キリスト教」について述べていくことにする。これは、アボットの著作で外せないテーマであり、フラットランドのストーリーは、このキリスト教と関係あるどころか、むしろ直球と言って良いぐらいにキリスト教について表現した話なのである。

先ほど述べた通り、著者のアボットは聖職者でもあり、イギリス国教会の「司祭」という肩書きを持っている人物であった。しかし、著作でその内容を風刺しているように、あまり、教会に尽くしていれば満足のような、熱心なタipesではなかったようである。

アボットのような人は大体、キリスト教徒の中でも、「グノーシス主義」や「神秘主義」寄りの考え方の人だと思う。

・グノーシス主義と、その元となる考え方



さて、ここで「キリスト教グノーシス主義」と、その元となる「グノーシス」の考え方についての話をする。ここは重要な所なので書くと長くなる。

まず、「グノーシス (gnosis)」とは「認識」という意味の言葉である。「知識」という意味も持っているが、それらを似たものとして扱う概念である。この言葉は紀元前にまでさかのぼる古代から伝えられており、この言葉をめぐる思想というのが古代において存在していた。先に載せたマークは「丸十字」と呼ばれていて、グノーシスで象徴として用いられているマークである。

グノーシスとは「認識」という意味であるが、これは「**神の知性の認識**」という意味を含んでいる。古代において、絶対的な神様の在り様を探索する立場として「**神秘主義**」というのがあったが、この「**神秘主義**」では、神の「**叡智**」(えいち)というのが扱われている。そして、この「**叡智**」とは、頭で知識として理解し習得するものではなく、直接認識し、体験することで得ることができるとされてきた。この「**叡智を認識する**」ことを目指すが、グノーシスの考え方である。また、グノーシスの思想における「**知識**」とは、こうした「**体験**」や「**認識**」と一体になった「**知識**」のことを言う。

■アボットの著作から学べること

さて、キリスト教とグノーシス主義の話が長くなってしまったが、そもそも本書のテーマは「4次元」についてである。

ここから、「4次元はどうすれば認識できるのか？」というテーマに沿って、アボットの「フラットランド 多次元の冒険」から得ることのできるヒントは何か？について考えてみよう。

・現実の原理をよく知る

まず、フラットランドの住人は、そこにある「幾何学」の原理についてはよく精通している。

より角の数が多し多角形ほど、高い身分であるという話であったが、高い身分は見た目だけで相手の角の数が分かるし、多種多様な形を持つ住人を扱うことにもなる。その他にも、建築の構造であったり、あらゆる「道具」も図形で出来ているため、住人は「図形」をめぐるフラットランドの法則にはよく精通している。

フラットランドで生きるには、フラットランドの仕組みとそこから作られるルールをよく知っている必要があるわけだが、我々の世界においても、「この時空」の原理をよく理解することと、そこから作られるルールについてよく知っている必要がある。せめて、空間における「x, y, z」の軸と、時間というもう一つの軸については、押さえしておくべきだと思う。そういう意味で、「フラットランド 多次元の冒険」の著作の内容を追うことで、「座標」の考

第二章 4次元思想とヌーソロジー

■「ヌーソロジー」とは何か？

本書の後半では、『ヌーソロジー』と呼ばれている宇宙論における「4次元」の扱いについて述べていく。

まず、「ヌーソロジー」とは何か？ これは、『半田広宣』という人の提唱した**宇宙論**であり、半田広宣さん本人のツイッター上（2016年時点現在）の説明では、「ヌーソロジーとは、**物質と精神の関係を空間という視点から接合しようとする具体的なアイデア論です。**」・・・とか書かれている。・・・なんのこっちゃと思う人もいるかもしれないが、人間の精神を「空間の見方」で説明しようとしている所があり、まさしく、「4次元」ともかなり関係のある宇宙論なのである。

そして、この半田広宣という人の提唱した宇宙論は、半田広宣という人が思いついたと言えそうということにもできるかもしれないが、出所は何かというと、**チャネリング**である。

チャネリング・・・。チャネリングとは何か？を一応説明しておく、高次元の知性体のようなものを自身の意識か頭の中でキャッチし、その情報を言語化するという行為のことを言う。つまり、解釈によっては謎の電波の受信か、統合失調症、膨大妄想だということもあり得るものである。知らない人は知らないものであるが、大なり小なりを含めると、その数は結構多い。有名所では、アメリカで流行っている存在でもある「バシヤール」というものがある。それから、自分が知っているものとしては「セス」や「ラムサ」など。日本産のものとしては、「日月神示」という神道系の啓示文書がある。西洋魔術の界限では、「アレイスター・クロウリー」という19世紀生まれの魔術師（当時のイギリスには「黄金の夜明け団」という魔術結社があった。ガチものである。）が、「守護天使エイウス」という

存在と交信し、「法の書」という本や「セラマ」という教えを打ち出したのも結構有名な話である。

そして、半田広宣という人が受信したのは、『冥王星のオコット(OCCOT)』と名乗る存在だった。約1989年と1995年の間、その存在の声が頭の中で聞こえるようになり、情報提供を始めてきたので、その情報と、その存在との対話内容をワープロに打ち込み、今日まで解説を続けることになった・・・という状況で大体合ってると思う。

「4次元」のテーマでこんな怪しげなものが出てくるわけだが、元々、「4次元」とは、「異世界」との交流が絡んでる話だと思う。従って、奇異なものの上等という態度で望んで欲しい、というのが自分の思うことである。確かに言えることは、この「冥王星のオコット」という存在がもたらした情報が、自分の4次元に対する理解を飛躍的に深めたということである。

『ヌーソロジー』に関する情報は、「Rainuのヌーソロジー入門」という、自分がネットで公開しているページでも説明している。そこには、半田広宣さんが「冥王星のオコット」を受信した時の話や、ヌーソロジーの持つ、全体の世界観が伝わるような所まで内容を公開している。その内容は、哲学・精神分析・神秘学・数学・現代科学・物理学・神話・古代思想・オカルティズム・スピリチュアルにも通じているような、多岐に渡る情報なので、良かったらそちらも見てみて欲しい。

「冥王星のオコット(OCCOT)」と半田広宣という人の対話から導き出せた「4次元」の情報は、既存の情報よりかなり明確に4次元の輪郭が分かるものだと思う。「フラットランド 多次元の冒険」でアボットが果たせなかった無念を果たせるのではないか？この章では、その内容について説明していく。

■「ヌーソロジー」における4次元導入

・「反転した空間」と呼ばれる場所

まず、ヌーソロジーで重要な情報として・・・これはヌーソロジーの情報の提供元である、チャネリングソース「オコット」が言ったことだが・・・「**反転した空間**」という存在がある。普段、我々が生きているのは物質的な「通常の空間」であるが、そこに「重なって存在している」らしいもう一つの空間がそう呼ばれている。そして、ヌーソロジーについて研究していくと、この「反転した空間」とは「4次元空間」と関わりがあることが分かってくる。

この「反転した空間」は、ヌーソロジーでは「**虚空間**」とも呼ばれている。ここで言う「虚」とは、数学で「**虚数**」と呼ばれている数字の「虚」である。「虚数」は、数学では「 i 」と表記される特別な数であるが、この数は、ヌーソロジー的にも、数学的にも、「4次元空間」を追求するにあたり、無くてはならない数なのである。

この「反転した空間」の特徴として、通常の空間のような「**時間**」が**存在していない**というのがある。また、それは「死後の空間」とも言えるような場所であるということも分かってくる。そうしたものが、我々の住む空間に重なって存在しているのである。「4次元空間」を認識するためには、そうした空間に対する認識を養っていく必要がある。

・「超越論的主観性」の方向

「4次元」の話と哲学との絡みで重要となるのが、哲学者「エトムント・フッサール」の『現象学』である。

フッサールは、数学から哲学に専攻を変えた人であり、発想が独特であるのが特徴な哲学者である。また、フッサールは、19世紀のヨーロッパにあった「近代理性至上主義」に対して、非常に危機感を持っていた人物であり、その危機感から自身の哲学である「現象学」を打ち出した。そして、その思想の方向性は、4次元思想とほとんど立場を同じくすると言っても良い。

フッサールの「現象学」の元となる考え方はこうである。まず、人間は、物理学的な3次元空間の見方を持っているから、今見ている景色をそのように見てしまう。しかし、「現象学」の考え方は、そうした物の見方は一旦『エポケー』（判断の保留）をする。そして、その上で「現象」というのを捉えた時、何が見えてくるのか？これがフッサールの「現象学」の考え方である。

その中で、フッサールは『超越論的主観性』という言葉葉を打ち出した。これは説明するとなんとも難しい説明が余儀なくされるような概念であるが・・・しかし、「4次元」を使うと話は簡単である。簡単に言うと、人間は「3次元空間」のイメージで自分達が今いる空間を見ている。しかし、「超越論的主観性」とは、それを超越したような空間の見方をする主観性のことを言う。つまり、意識が「4次元」へと向かう方向性だと言って良い。こうした視点から、目の前で起きている現象を新たに捉えるというのが、「現象学」の考え方である。

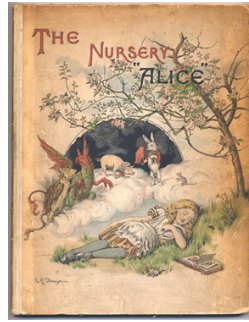
フッサールの言う「物の見方を『エポケー』して現象を捉える」というのも、先ほどエルンスト・マッハの絵で説

・4次元時空VS純粋持続

次に話をアインシュタインに移すが、アインシュタインは、特殊相対性理論の中で「ミンコフスキー時空」という概念を用いる。それは、物体が光速度に近づくことによって時空が歪んでくるという性質を持つ。この「ミンコフスキー時空」のような性質を持つ「4次元時空」が、物理学において「4次元」という概念として定着することになる。ここで、アインシュタインがやったことは「時間に新しい解釈を与えた」ということだと言える。それによって、4次元目の軸を「時間」と解釈することもできるようになったのである。

そして、先ほど出てきた哲学者のベルクソンは、アインシュタインと同時期に活躍した哲学者であり、時間の捉え方が正反対だったことで有名である。アインシュタインが相対性理論を発表した時、ベルクソンは、アインシュタインが「4次元時空」として時間を捉えることに反対する意図で、『持続と同時性』という論文を発表した話が有名である。

アインシュタインが言った「特殊相対性理論」における「時間」の法則は、物体が「光速度」に近づくかどうかによって伸び縮みする（もう少し詳しく説明すると、止まっている自分と動いている相手がいる場合、止まっている自分の時間の流れに対して、動いている相手の時間の流れが相対的に遅れている）というようなものであったが、このように物理的に時間を捉えることに、ベルクソンは異論があった。ベルクソンの哲学は、心理的なものであり、「時間」はその「質」を認識することによって捉えられるといったような、そもそも物理学では捉えられないような、「生命」が持っているものとして時間を扱っていた。その為、両者の論ずる所がぶつかるのは必然だったと言っても良いと思



「4次元空間」に絡んだ話として、「精神分析」のジャンルへと話を移していこう。人間が毎晩見ると言われている「夢」。「夢」については、臨床心理学者である「ジークムント・フロイト」や「カール・G・ユング」が、「夢」や「無意識」というジャンルについて取り組んだことで有名である。フロイトの解釈する「夢」は、「意識から抑圧されている箇所の表れ」という視点で止まっていたが、ユングの解釈する「夢」は、オカルトや神話、霊能力者の見る景色かというぐらいにまで発想が及んでいる。

フロイトやユングがこう言っていたわけではないが、実はこんな話がある。「夢」とは「4次元空間」に他ならないのである、と。自分はこの話は本当だと思っていて、「4次元空間」以外の側面もあるだろうけれど、「4次元空間」としての性質も持っていると思う。ポイントは、「主観領域」で行われているという点と、「時間軸がない世界」という点である。

生き方は、「4次元時空」という、「物質」と「時間」の作る法則が絶対とする考え方や、そうした価値観をベースにしているから生まれてくる・・・という理由があるのだと思う。そういう絶対的な価値観を緩和していくためにも、「4次元空間」というものに対して意識を向けていくことが必要なのではないかとと思う。

4次元思想的には、「微小なもの」や「ミクロ」に意識を向けつつ、3次元空間に対して垂直に立つ軸を見出すことで、その道を発見することができる。

■ 4次元思想と「自己」の発見

・自身の「主体」の発見

さて、ここらで「何故、4次元を思考すべきなのか」について、もつと突き詰めていくことにする。

ここからは、「4次元」の話から、「心理学」や「精神分析」の話などと、もつと絡んでいくことになる。

まずは、「ジャック・ラカン」という心理学者が主張した内容になるが、**我々は、実は自分の本性となる存在をなかなか発見することができないものなのである。**

ラカンは、人間の自我の形成について『**鏡像段階論**』という説を唱えた。ラカンの「鏡像段階論」によると、まず、人間は、幼児の段階では、まだ「自分が自分である」という感覚が持てておらず、ただ単純に「目の前に光景がある」というのを認識しているだけである。この時はまだ、自分の身体に関してもバラバラに認識しているに過ぎず、目の

第三章 4次元思想・エトセトラ

これまで、『4次元思想とフラットランド』と『4次元思想とヌーソロジー』という章を書いてきたが、これらは、「4次元思想」に関して、大まかに述べておきたかったメインテーマであった。しかし、ここから先は、その他に書きたいことを「4次元思想・エトセトラ」という章として、書いていこうと思う。

・仏教と4次元

まずは、「**仏教**」についてである。仏教は、日本で普及している代表的な宗教としてもお馴染みであり、世界三大宗教の一つでもある。日本でよく使われているのはお葬式関連の事業であり、「死」にまつわる儀式を行う時に使われているのが特徴でもある。

仏教の発祥は、紀元前5世紀頃のインドにて、「**ゴータマ・シッタールタ**」（**釈迦**（しゃか）とも呼ばれる）という人物が開祖として出てきたことで始まる。その開祖は、「目覚めた人」という意味で「**ブツダ**」とも呼ばれている。東洋を中心にその教えが伝わり、様々な流派が生まれていきながらも、日本にも現在まで伝えられていった宗教であるが、この「**仏教**」で教えられていることは、よく見てみると4次元的世界観の宝庫でもあったりする。

そもそも、「**仏教**」には、日本においては「**死**」についての行事を司つてるといふ性質があったり、非物質的な世界への探求という姿勢がある。それから先の章でも説明した通り、「**グノーシス**」の思想を持っている宗教でもある。そういう性質に関していえば、4次元思想との接点があると言えるだろう。

例えば、仏教で言われている「**色即是空、空即是色**（しきそくぜくう、くうそくせしき）」という言葉がある。

※

- ・このサンプルは書籍版の一部を抜粋しています。
- ・サンプルのためページ番号は省略しています。
- ・書籍版の図は白黒、電子版の図はカラーとなっております。
- ・電子版は文字サイズが自由に変更可能なため、書籍版と少しレイアウトが異なります。